

研究ノート

日蓮聖人の即身成仏義…『木絵二像開眼之事』を中心に

岡田 文弘

第一節 問題の所在と方法

日蓮の成仏に関する教義については、さまざまな説示が混在・並存していることがつとに知られている。そのため十分な精査が必要であると度々目されており、先行研究においてもその内容が検討され、また本・現代宗教研究所でもセミナーが催される(第二十六回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー「唱題成仏を問う」、二〇一七年)など、今日に至るまで多くの議論がなされている。

そこで本研究も先学に引き続き、日蓮の成仏論について考察を試みるものであるが、特に『木絵二像開眼之事』を題材として取り上げる。同書には即身成仏の教義にかんして詳細な論述がなされているとともに、即身成仏に類似しつつ異なるとされる「生身得忍」との対比が行われてもおり、これを検討することで日蓮の成仏論の特徴が明らかにできると考えられる。

以下、考察を始めるにあたり、まず『木絵二像開眼之事』について概要を述べておく。

同書は、文永十(一二七三)年、佐渡・一谷にて著述された、真蹟曾存の遺文である。その内容…構成は、

（一）三十二相について概説し、そのうちの「梵音声」は、音声ゆえに仏像では表せないとする。そこで、經典の声に見立てて安置することで具足せよ、とする。安置すべきは『法華經』で、これをもって像は初めて生身の「円仏」となる（一方、藏教の經を置けば声聞、通教の經では緣覺、別教の經では菩薩の像となる）²。

（二）遺骨供養に話題が移行する（前述のように、前段（一）では木・絵の仏像の開眼、すなわち木・絵の素材たる草木等の成仏について説明している。その草木成仏は非情成仏からの連想で、物質としての遺骨の成仏（遺骨供養）に話が及んだと捉えられる）。ここで、「即身成仏」の「生身得忍」別を述べる。

（三）即身成仏義について、『妙法蓮華經』提婆達多品第十二の「深達偈」³を用いて説明する。概要は以上とし、次節より考察に入る。

第二節 『木絵二像開眼之事』における生身得忍と即身成仏の対比

前述の通り本書においては、即身成仏に対比される概念として「生身得忍」が紹介されている。この生身得忍とは「身雖人身、心同仏心」⁴（定遺七九四頁）と言われるように、体は生身の人間のままで心のみが仏心になっている状態を指す。これは一般に「父母所生身のままに成仏すること」（西片「一九八〇」二〇九頁上）と捉えられることの多い即身成仏に極めて類似した状態である。しかし日蓮はこれを即身成仏とは似て非なるものとし、両者の対比を試みている。

その対比を整理すると、以下のようになる（なお「」内の引用文はいずれも定遺七九四頁）。

① 状態

【生身得忍】体は人、心は仏

・「身は人身、心は法身」

・「身雖人身、心同仏心」

【即身成仏】身・心ともに仏（色心ともに仏）

・「生身即法身、是を即身といふ。……彼魂を変て仏意と成す、成仏是也。」

・「即身の二字は色法、成仏の二字は心法。」

② 追善供養について

【生身得忍】「華嚴・方等・般若の円をさとれる智者」⁵が遺骨供養をすれば、死者はこの状態になる

【即身成仏】「法華を悟れる智者」が遺骨供養をすれば、死者はこの状態になる

③ 手本となる仏弟子

【生身得忍】純陀（『涅槃經』に登場、釈尊に最後の供養をした人物）

【即身成仏】龍女（『法華經』提婆達多品に登場、文殊の教化で即身成仏を果たす）

③ 深達偈の配当

【生身得忍】深達罪福相徧照於十方

【即身成仏】微妙淨法身具相三十二

第三節 即身成仏Ⅱ三十二相具足か？

前節で本書における生身得忍・即身成仏の対比を見てきたが、そこで特に着目すべきは③深達偈の配当である。ここで、即身成仏には「具足三十二」の文句が配当されているため、即身成仏は「三十二相が具足した状態になること」と一応解せるが、これには大いに問題がある。この解釈に立てば、本書の内容、および他の日蓮遺文の内容とも齟齬が出てくるのである。以下、これを三点にまとめて確認したい。

一点目、前述のように本書の冒頭では仏像の三十二相具足について述べられているが、そこで梵音声を『法華經』安置によって具足させた場合は仏と成るが（「三十一相の仏の前に法華經を置たてまつれば必純円の仏」定遺七九二頁）、他の經典であつた場合には成仏しない（たとえば『阿含經』を置けば声聞に、『華嚴經』や『般若經』を置けば菩薩になり、成「仏」とはならない）と説かれている。

「木画の二像の仏の前に經を置けば三十二相具足する也。但心なければ三十二相を具すれども必仏にあらず、人天も三十二相あるがゆへに。木絵の三十一相の前に五戒經を置けば此仏は輪王とひとし。十善論と云を置けば帝釈とひとし。出欲論と云を置けば梵王とひとし。全仏にあらず。又木絵二像の前に阿含經を置けば声聞とひとし。方等般若の一時一会の共般若を置けば縁覺とひとし。華嚴方等般若の別円を置けば菩薩とひとし。全非仏。大日經・金剛頂經・蘇悉地經等の仏眼大日の印真言は、名は仏眼大日といへども其義は非仏眼大日。例せば仏華嚴經非円仏。名にはよらず。」（定遺七九一―七九二頁）

したがって、三十二相具足が即座に成仏となるのではなく、『法華經』が介在することが必須条件となる……さす

れば、成仏の本質的な要因は、三十二相具足よりもむしろ『法華経』の存在にあるのではないかと推察される。⁶ そのため即身成仏においても、単に三十二相具足とするだけでは不十分なのではないか、三十二相具足にどれほどの重要性があるのか、疑念が生ずるのである。

つづく二点目。本書後半で説かれる遺骨供養について、「法華を悟れる智者死骨を供養せば生身即法身。是を即身といふ。」（定遺七九四頁）とし、法華を悟れる智者が遺骨を「即身成仏」させるといふ説が述べられるが、当然のことながら、人の遺骨は三十二相を具足してなどいない（具足しようがない）。したがって、即身成仏＝三十二相具足と捉えると、ここでも齟齬が起ころのである。

そして最も問題とすべきは三点目、龍女成仏の問題である。第二節で示したとおり、本書で日蓮は即身成仏の手本として龍女を挙げている。

提婆達多品には、龍女の成仏について「文殊の教化による、海中での成仏」と「変成男子を経た、南方無垢世界での成仏」の二種が説かれている。⁷ 更に日蓮は前者を女人成仏の正意とし、重視したことが明らかである。⁸ 顕著な例としては、初期の『法華題目抄』には「文殊師利菩薩の妙の一字を説給しかば忽に仏になりき」（定遺四〇一頁）と述べ、⁹ 『祈祷鈔』では「文殊の教化によりて、海中にして法師・提婆の中間、わづかに宝塔品を説れし時刻に、仏になりたりし事ありがたき事也。」（定遺六七三―六七四頁、傍線部筆者）と明確に「海中での成仏」を示し、また五大部の一である『撰時抄』には、「五障の龍女は蛇身をあらためずして仏になる」（定遺一〇〇三―一〇〇四頁、傍線部筆者）と書かれている。このように日蓮は、身を変ずる（変成男子）前の、女身・畜身のまま、すなわち生身のままでの海中での成仏を龍女成仏の正意としている。

ところが、本書『本絵二像開眼之事』で即身成仏の正意とされる「三十二相具足の成仏」が明確に説かれるのは、龍女成仏においては、変成男子後の成仏なのである。

「皆見龍女、忽然之間變成男子、具菩薩行、即往南方無垢世界、坐寶蓮花成等正覺、三十二相八十種好」（大正九、一七〇上二三―二五）

すると本書の論理では、龍女の即身成仏は、變成男子後の成仏こそが正意となり、また海中成仏（現身たる畜身・女身を捨てないままでの成仏）は「生身得忍」とみなされる可能性すら出てくるのである。この問題について、いかに整合性がとれるのかについて、次節で検討したい。

第四節 『戒体即身成仏義』の「無表色の三十二相」

ここで、日蓮の即身成仏義を知る上で重要な文献であるところの、修学期に清澄で著したとされる『戒体即身成仏義』を見てみたい。¹⁰

「龍女が即身成仏は、不改畜生蛇道身、三十二相之即身成仏也。畜生の破戒にて表色なき身も、三十二相無表色の戒体を発得するは、三惡道の身即五戒たる故也。」（定遺九頁、傍線部筆者）

ここで日蓮は龍女の即身成仏は「三十二相具足の即身成仏」ではあるが、それは「畜生・蛇身を改めないままの即身成仏」（「不改畜生蛇道身」）でもあるとする。これは一見矛盾に見えるが、更に日蓮は「目には見えない、形ではない三十二相」（「三十二相無表色」）が備わった、とするのである。¹¹

この「無表色の三十二相」の解釈によるならば、海中で文殊の教化を受けた龍女は生身に「目に見えない三十二相」をそなえ、外面には「生身の姿のまま」成仏した、すなわち即身成仏ということになり、先述の矛盾は解消さ

れ整合性がとれることになる。

またこの「無表色の三十二相」を認めるならば、本稿第三節で提示した他の二つの疑念……仏像（草木）の（形としての三十二相具足とは無関係に成立する、一念三千の）即身成仏や、外面に三十二相を具せない死骨の即身成仏が「具相三十二」と称されることも、矛盾ではなくなる。

このように、『戒体即身成仏義』における「無表色の三十二相」を想定すれば、『木絵二像開眼之事』に見られる問題点は会通・解消できると言えよう。¹²

第五節 まとめ

本稿では、日蓮の成仏論を考察すべく『木絵二像開眼之事』における即身成仏義を確認した。更にそこから、三十二相具足を即身成仏とする（生身のまま心のみ成仏することは「生身得忍」として区別する）説示について問題点を指摘した上で、『戒体即身成仏義』における「無表色」の三十二相具足の説を援用し、会通を試みた。

（テキスト）

定遺↓立正大学宗学研究所『昭和定本 日蓮聖人遺文』（身延山久遠寺、一九五二―一九五九）

大正新脩大藏経

（参考文献）

浅井円道「一九九九」『日蓮聖人と天台宗』山喜房仏書林

阿部龍一「二〇一七」『「平家納経」と女性の仏教実践（東アジアの女性と仏教と文学『法華経』と女人の形象）』『アジア遊学』

二〇七、勉誠出版、一六三―二〇八頁

岡田真美子「二〇一三」「改転の女人成仏と龍女成仏 竺法護の訳経群を中心に」『法華仏教と関係諸文化の研究 伊藤瑞穂博

士古稀記念論文集』一二二—一二三頁

北尾啓王「一九三四」『日蓮聖人遺文全集講義』第一卷、大林閣

小林是恭「一九三四」『日蓮聖人遺文全集講義』第七卷上、大林閣

西片元証「一九八〇」『日蓮聖人における「即身成仏」の一考察』『印度学仏教学研究』五七（一九九一）、二〇九—二一一頁

「一九八三」『日蓮聖人教学における即身成仏の一考察』『印度学仏教学研究』六三（三三—）、三七四—三七六頁

花野充道「二〇一四」『日蓮の生涯とその思想』小松邦彰・花野充道編『シリーズ日蓮2 日蓮の思想とその展開』春秋社、

四—八一頁

穂坂悠子「二〇〇八」『日蓮聖人の女性観 女人成仏論を中心に』『日蓮教学研究所紀要』三五、一四二—一五三頁

間宮啓壬「二〇〇八」『日蓮における救済の構造（増補改訂）』『仏教文化の諸相 坂輪宣敬博士古稀記念論文集』三三三—三

五五頁

間宮啓壬「二〇一七」『日蓮における宗教的自覚と救済』東北大学出版会

1 本研究の主題である即身成仏に関わる研究で主要なものを挙げれば、天台と日蓮の教義を対比させるという西片元証氏の
一連の論考（西片「一九八〇」「一九八三」等）、また近年では、即身成仏思想と靈山往詣思想との関連性について考究した
間宮「二〇〇八」（間宮「二〇一七」に再録）などがある。

2 この際に、草木（非情）成仏と一念三千の問題も触れられるが、『観心本尊抄』で見られる説明ほどは詳細ではない。

3 「深達罪福相 遍照於十方 微妙淨法身 具相三十二 以八十種好 用莊嚴法身 天人所戴仰 龍神咸恭敬 一切衆生類
無不宗奉者 又聞成菩提 唯佛當證知 我聞大乘教 度脫苦衆生」（大正九、三五中二八—下五）

4 出典は『涅槃經』「南無純陀、雖受人身、心如佛心。」（北本、壽命品第一之二、大正一二、三七二中二六—二七。南本、
純陀品第二、大正一二、六二上二二）。日蓮の引用により近い文は『菩提心論』の「涅槃經云、南無純陀、身雖人身、心

同佛心」(大正三三、五七三中二九―下二)。いずれも傍線部筆者。

5 小林「一九三四」一五八頁は、円体無殊の天台者とする。

6 なお『法華経』の力用すなわち一念三千が、木絵の像を成仏させるといふ説については、『観心本尊抄』に見られるところである。

7 海中成仏…「智積問文殊師利言……頗有衆生勤加精進修行此經、速得佛・不。文殊師利言、有。娑竭羅龍王女、年始八歳。……能至菩提。」(大正九、三五中一三―二二)

變成男子の成仏…「皆見龍女、忽然之間變成男子、具菩薩行、即往南方無垢世界、坐寶蓮花成等正覺、三十二相八十種好」(大正九、一七〇上二三―二五)

8 なお、現在は龍女成仏⇨變成男子の成仏とのイメージが一般的になっているが、従来は海中成仏説が通説であつたとの論証を阿部「二〇一七」が行なっている。

9 ただし、その直後につづく「あまりに不審なりし故に、宝浄世界の多宝仏の第一の弟子智積菩薩・釈迦如来の御弟子の智慧第一の舍利弗尊者、四十余年の大小乗経の意をもつて龍女の仏になるまじき由を難ぜしかども、終に叶はずして仏になりにき。」(定遺四〇―四〇二頁)の文の傍線部を、問宮「二〇一七」は變成男子後の成仏への言及と捉える。同論は、このように日蓮が龍女の成仏を二種としつつも、前者を重視した旨を論じている(問宮「二〇一七」四一五―四一八頁)。

10 同書の真偽問題についての最新見解としては「早くは日祐(一二九八―一三七四)の『本尊聖教録』(通称、『祐師目錄』、一三四四成立)の「写本の部」に記載され、日全(一二九四―一三四四)の『法華問答正義抄』(一三四二執筆)にも、日進(一二七一―一三三四・四七)の『本迹事』にも引用されているから、真撰と見て何ら問題はない」(花野「二〇一四」八頁)があり、また本宗の浅井円道師も本書をもって聖人初期の思想を考察している(浅井「一九九九」二八三―二八五頁)こと等から、比較的信頼に足る写本遺文として用いることとする。

なお、佐前、しかも立教開宗前・修学期の著作を佐中のそれと単純に比較できるのかという問題も勿論あるが、『戒体即身成仏義』には浄土教批判など後の日蓮思想にも継承される要素が多分に見られるので、本書を援用することには意味があ

ると考える。

11 「御文によれば提婆品会上に於ける龍女の三十二相は、釈尊等の如き表色無表色とも完全に具足せるそれにあらずして、凡人には不可解である無表色無作のそれであつたやうだ」（北尾「一九三四」五七頁）

12 以下、三点の補足をしておく。

【補足(1)】

ここで、あわせて円珍『授決集』について述べておきたい。同書には以下のような文がある。

「龍女速疾具三十二相、即是一念聞經究竟三菩提也。舉一例諸。」（大正七四、二八七上三一五）

この「龍女速疾具三十二相」は南方無垢世界成道のことかと一見見えるが、つづいて「即是一念聞經究竟三菩提也」とあり、一念の聞經で菩提を究竟した、すなわち文殊から聞經して（畜身女身のまま）即身成仏したことが述べられている。つまり海中成仏と「龍女速疾具三十二相」が結びつけられているのであり、これは「無表色の即身成仏」の思想に近いと考えられる。またこの文に「舉一例諸」とあるが、本書『木絵二像開眼之事』成立の前年に成立した『開目抄』において、日蓮はこの語を用いて龍女成仏について述べている（「挙一例諸と申て龍女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあげたるなるべし」定遺五九〇頁）。

ここから日蓮は本書『木絵二像開眼之事』において龍女成仏を著述する際に『授決集』の文を念頭におき、そこで三十二相具足の即身成仏を述べたのではないかと推察される（なお、『当体蓮華抄』も『授決集』を引いて龍女の女人成仏を論ずるが、同書は真偽問題が大きいため、ここでは論考しない）。

【補足(2)】

無表色の三十二相について、他の日蓮遺文には「妙の文字は三十二相・八十種好円備せさせ給釈迦如来にておはしますを、我等が眼つたなくして文字とはみまいらせ候也。」『妙心尼御前御返事』定遺一七四八頁とあり、「我々の目には仏の三十二相は見えず、經の文字として見える」という論が示されている（関連：「応化非真仏と申て、三十二相・八十種好の仏よりも、法華經の文字こそ真の仏にてはわたらせ給候へ。」（『御衣並単衣御書』定遺一一一頁）。この論は、開經偈の「色相の文字は

即ち是れ応身なり」として、現在まで日蓮門下に継承されていると言えよう。

【補足③】

なお「生身得忍」について説明している遺文には、『戒体即身成仏義』（『華嚴經』）や『梵網經』に説かれる速疾の成仏は生身得忍である、と説示。「されば華嚴經には初発心時便成正覺。梵網經には衆生受仏戒即入諸仏位位同大覺已真是諸仏子文。答云、法華已前の円の戒体を受けて、其上に發得生身得忍也。」（定遺五頁）、『大田殿女房御返事』（『菩提心論』所説の即身成仏は生身得忍と解すべき、と説示。「されば此論次下に、即身成仏をか、れて候が、あへて即身成仏にはあらず。生身得忍に似て候。」定遺一七五七―一七五八頁）そして『秀句十勝抄』などがある。

このうち『秀句十勝抄』では、『菩薩處胎經』に説かれる「不捨身・不受身」の現身での成仏を「生身得忍」とし、真の（即身）成仏ではないと説示している。

「胎經云「私云爾前円生身得忍也」。魔・梵・釈・女皆不捨身不受身 悉於現身得成仏。」（定遺二三七四頁）
『菩薩處胎經』の該当箇所は以下のようになっている。

「時有七十萬二千億女、在大曠野非人行處。齊同一行解空無相無願之法、一日一時三等通達、①即成佛道、衆相具足。……

是謂、②不捨身・受身而成佛道。」（大正一二、一〇三五下四―九、傍線部筆者。日蓮が言及しているのは傍線②）

この經文には甚だしい矛盾がある。傍線①では「衆相具足」つまり仏の諸相三十二相を身に具したということで、「生身の身を捨て、新たに仏身を得た」ということになる。しかしながら傍線②では「不捨身・受身」つまり今までの身を捨てることも新しい身体を受けてもいない、としており、記述が食い違っている。

いずれにせよ『菩薩處胎經』における女人成仏は、①のように「衆相具足」とあるところから、無表色の三十二相を具する即身成仏ではなく、従って②は即身成仏と似て非なる「生身得忍」としてあくまで解される、と会通したものか（以下の論を参照「ここに記されている「衆相具足」という表現を看過してはならない。主人公は成仏後「衆相」すなわち仏の大人相を備えたとしてるので、結局は成仏前とは姿が変化しているのである。日蓮が『菩薩處胎經』の成仏を「生身得忍」として、一念三千の成仏としなかったのもこのためであろう」岡田「二〇一三」一二六頁下）。